

子供のがまゝ

倉橋 惣三

一 わがまゝといふことは子供の生活の謂は、一つの著しい特色である。手のつけようもない様な甚しいのは別としても多少ともにわがまゝはどんな子供にもある。全然わがまゝのない子供があつたならばそれは子供らしくない子供と言つてよい位である。

一體わがまゝといふことは、言葉の通り、自分の思ふまゝを徹すといふことであつて、遠慮とか我まんとかいふことの反對である。他人の都合よりも自分の都合、欲望を主にして、それを、どこまでも押し通しもし、言ひ張りもし、實行もしてゆかうとするのである。それが時と場合とによつて種々の形、さまざまの名稱になり、無理とも強

情とも、身勝手ともなれば、又だいつ子とも、さかぬ子とも呼ばれるのであるが、要するにわがまゝに他ならない。或は之れが對手次第で反抗對抗の態度をとる様にもなれば、怒りともなり喧嘩ともなる。いづれにしても他人に負けて居ない自我主張の心から出づることである。

處で斯ういふ廣い意味に於てのわがまゝなるものには、二つの方面からの見解を明かにしなければならぬ。其の一つは對手といふ點からで、第二は自分といふ點からである。勿論對手なしの強情、自分だけのえて勝手ひとり喧嘩などいふことは無い譯のものであるが、考への上では自他の二面を區別して考へることが出来る。

先づ對手といふ點から見ればわがまゝが善くな

いことであることは言ふまでもない。人間は何人でも自分ひとりだけで此の世に生活して居るものではない。他人と一緒に居る以上、自分ばかりを押し通して、他人の都合をも希望をも顧慮しないといふことの出来るものではない。そこにお互の譲歩もあり、がまんもあつて、始めて無事に圓滑に事が濟んでゆくのである。わたしが／＼、俺が／＼と各自各々なことばかり考へて居たのでは、衝突だらけの殺風景な世の中が出来て仕舞ふ。斯ういふ意味に於て、わがまゝが道徳的に善くないことであるといはれるのである。況して子供の場合、對手は多く長上者である。直接長上者でないまでも、自分よりは多くの智慧と親切とを以て自分のことをして呉れるものである。それに對して自分の慾望を押し通すわがまゝが、善からざることは言ふまでもないことである。此の場合わがまゝの反對の從順とか、すなほとか、よくいふことを聽くとかいふのが善良なる態度であつて、又子

供ながらに美しい感心なことであるのは勿論である。そこでわがまゝは子供生活の特色ではあるが困つたこと悪いことに數へられわがまゝに對する教育といへば、昔から一つに其の矯正策にあることも當然なる次第といふべきなのである。

しかし、もう一つの方の自分といふ點から考へて見ると、そこに又多小別個な問題が起つて來る。蓋し、わがまゝは其の當人の方から言へば、強い自我主張に外ならないのであつて、其の自我主張といふことは決して悪いことではなく、寧ろ人間の生活の上に大切なることなのである。それが相手と、如何なる交渉を起こし、他人と如何なる關係を生ずるかといふことを暫く別問題として、自我主張といふことだけに就て少しく考へて見なければならぬ。

蓋し、自我主張といふことは、もう一つ源へ遡れば、すべての人間が生れながらにして必ず具へて居る自我、感情から發するものである。そこで

其の自我感情とは如何なるかと言ふと、凡べて自我につける感情をいふのであつて、吾々が有する、『自分の』『自分に』『自分が』といふ類の感情が即ちそれである。『自分の』といふは多くは所有品などに關したことで、同じ物品であつても他人のであるのと自分のであるのとは感情が違ふ。『自分に』と『自分を』とかいふは、主として自分に或る取扱ひを受けた場合で、同じ取扱をせられても、他人がせられた時と、自分にせられた時と、まるで違つた感情が起る。又『自分が』といふのは、つまり自分と他人とを區別する場合で、その時他人がといふ時は一種異つた感情の伴ふことは言ふまでもない。要するに人間は自分といふことには特別な強い一種の感情を有して居るものである。

此の自我感情は子供にもある。子供にもあるのみでなく、純粹な丈けに成人より却つて強くあらはれる位である。尤も生後一二年の間は別段明瞭な感情としてはあらはれないが、三四歳頃になる

と著しく之れが起つて来る。此の齡頃の子供の言ふことを聽いて居ると之れは坊ちゃんのだとか、坊ちゃん何がどうしたとか、誰れが坊ちゃんをどうした、坊ちゃん何をどうしたとか、一々うるさい程に自己を語るものである。假令は今までは餘りさういふことはなかつたのを、何かといふと坊ちゃんの父様とか坊やの母様とか、坊の玩具だとか、事々に所有者たる自己を一々語る様になるものである。之れは勿論、子供が自己といふものを深く考へて言つて居る譯でないが、如何に心の中に自我感情が強く起つて居るかといふとが、言葉使ひの末にも察せられるのである。だん／＼年齢が進んで来ると、それが一層強く、自分にもはつきりしたものになる。さうすると、自分が何々々と、何でも自分を負けないものにし、他人と較べて勝う／＼とする心持が著しくなる。所謂競争心が之れであつて十歳前後頃から最強くあらはれて来る。假令は遊びにもそれが出て来て、何

でも競争的なことが面白くなる。また友達同者などでも、互の間に此の心持が始終起り易い。また共同とか團結とかいふことはよく分らないで、何でも自分を主にした、對立的の生活が主として行はれる。それが段々青年になつて來ると共同的感情などが起つて、急に反對の方に生活を向けたりする様になるが、それまでの子供生活は専ら自我感情に支配せられて居るものである。

自我感情が主になつて居る子供の生活が、常にわがま、であり勝ちなのは自然のことである。即ちわがま、といふことは一と通り子供の自然性であるといへるのである。のみならず、其の間に強い自我の養成がされるのである。勿論わがま、の中に不自然なるものも多くあつて、之れは後に考へようと思つて居るが、若し、子供の時から少しの自己主張といふ類の氣分もなく、所謂意地も張りもしないといふ如きものがあつたならば、現在に於ては至極取り扱ひ易い、所謂おとなしい子で

あるには相違ないけれども、其の將來は甚だ懸念の至りである。殊に非常に厳しい壓迫の下に成長して、芽が出ればつみとられるといふ様に抑へつけられて育つた子供などの中には、妙に、いぢけて無氣力な卑怯なものが出來て仕舞ふことが屢々ある。之れは子供の時に於て、適當な自我主張の練習の機會を與へられず、折角自然が與へて呉れた此の大切な本性の發達を阻碍せられて仕舞ふために、さういふ哀れなことになるのである。昔から、子供は、きかぬ子位が却つて末たのもしいとか、喧嘩の一つ位する子でなくては駄目だなどいふのは、言葉が如何にも亂暴ではあるが、つまり自己主張力の必要を言つたものに他ならない。

廣い意味に於ける子供のわがま、は斯う考へて來れば、根から捨てたものでないといふことが分るのである。

二

しかしながら、子供のわがま、は實際に於て、

たゞ其の自然性の正當なる發露ばかりのものはない。寧ろ多くの場合に於ては不正當なるわがまゝであつて、而して、其の不正當の原因は多くは教育の誤りにある。以下、此の點を調べて教育上の注意を明かにしなければならぬ。

子供は其の本性として自己主張の強いものである。又其の思慮經驗の不足から、自分の振舞が他人に如何様な影響迷惑を與へるものかを考へ得ないものである。故にわがまゝは已むを得ないことであるといふ様なものゝ、子供であるからとて全く他人のことを顧み得ない譯のものではない。年齢相當に、他人を顧みるといふ力も心持ちも發達する筈である。ところが、或る人は子供だから仕方がないといふ方に傾く。さうするとつい甘やかしになる。即ち正當以上のわがまゝをゆるす様になる。また或る人は、いくら子供でもといふ方に傾く。さうするとつい厳し過ぎる様になる。即ちわがまゝが無理な抑へつけられ方をする様にな

る。わがまゝに對する教育の誤りは、斯くして二つの方向に起るのである。

(イ)わがまゝの増長は外からの抑へ方が軟い爲だといふことは誰れにも分る、しかし、心理的に考へて、わがまゝの増長は決して外の力次第のものではない。若し外の力次第のものならば、昨日まで甘やかして居た爲にわがまゝが過て居るのも急に厳しくすれば、直に其のわがまゝがやむ筈である。處が實際は決して左様いかない。假令ば、世間に多くある例であるが、『まだ幼いからと言ひなり放題わがまゝを通して置くが、必要の時になれば何時でも其のわがまゝを抑へることが出来る』と斯う考へても仲々うまくいかない。之れは何故であらうか。木の枝や竹のやうなものならば、外から力の加へ方だけによつて伸びさせることも抑へつけることも自在であるが、子供の自己主張は左様容易く自由にする事の出来ないのは何故であらうか。それはわがまゝを徹す方の力が自

然性として子供の内にあると同じやうに、之れを抑へる方が力も、子供の内にあるからである。言ひ換へれば自己主張の力と共に、自己抑制の力も子供が自分で有して居るものなのである。甘やかしの結果は外の抑へが弱いといふだけではない。子供の此の自己抑制力を弱くして仕舞ふのである。即ち子供にとつて、外の話でなく内の話である。

甘やかされてのみ育つて來たわがま、ものが其のわがま、を傍若無人の勢で振舞つて居るのは、一寸考へると、大層強いことの様に見える。他人との遠慮も憚りもなく自分の思ふ存分を徹してゆくのは如何にも強い人のやうに見える。併し、之れを自己の主張力といふ方から見ないで、自己の抑制力といふ方から見ると、決して強いのでなくて寧ろ大に弱いのであることになる。自分が抑へられない。人間としてこれ程弱いことがあらうか。丁度力のない馬乗りが手綱を引きしめることが出來ないで、荒れ馬と共に飛んでゆくやうな

ものでなる。如何にも勇壯にえらさうに見えるのは外からのことで、實は大いに弱いのである。實際子供にも成人にも此の種のわがま、が案外澤山ある。而して之等は皆、適當なる自己抑制力の養成をされなかつた結果に外ならない。是に於て教育上第一の結論として斯ういふことがいへる。

子供のわがま、に對する教育は、外から如何に抑へるかといふことが肝要な問題ではない。如何にしたら子供自らに内から抑へることの出来るやうに養成し得るかといふことが必要な問題なのである。即ち一言にしていへば、子供の年齢相應に自己抑制力を養つてゆくことになる。(ロ)しからば、甘やかしの反對のきびし過ぎる方からは如何なる結果が起るかといふと、之れは又一層憂ふべきことになるものである。蓋し、自己主張が子供の自然の本性であることは前に繰りかへし充分述べた通りである。自然の本性であるからには適當な満足が與へられなければならない。

雜 錄

○全國教育大會保育部會

今秋大禮御舉行を期として京都に於て開催せらるべき全國教育大會内の保育部會は左の通り開かるゝ由なり。

開會期日

總 會 大正四年十一月二十六日
同 十一月三十日

保 育 部 會 同 十一月二十八日 自午前九時
十一月二十九日 至正午

保育部會々場 市立高等女學校 堀川通四條上ル
電車四條堀川ニテ下車

出席の申込 至急府縣廳又は府縣教育會を経て全國教育大會

事務所宛申込みを乞ふ、若し本會より通知を發する必要があるときは府縣廳又は府縣教育會に宛てて發することあるべし

講 演 講師二名目下交渉中

五分間演說 希望の方は演題及氏名御通知を乞ふ

其他

御大禮函簿拜觀御所離宮拜觀出願中博覽會神社佛閣等觀覽交渉

會員章

會員には會員章を交附せらるゝ筈につき出席申込の上會員章を豫め受取られたし

全然満足と與へられずして無事に順當に濟むべきものではない。若し無理にも満足が與へられないといふことになる、不自然な形に變つてゆかざるを得ない。實際餘りに嚴しい干渉や薄倖な境遇などからして、始終抑へられ、のみして居てついで子供らしい正當な自己主張に満足が與へられないといふ様な子供は、妙にひねくれた陰性な、表面は素直におとなしい様であつて、其の實、心の中は大に主我的な、所謂いやに意地張つた、偏屈な性格の人になることの多いものである。即ち外へ出ないで、内に鬱屈せるわがま、であつて、此の位子供らしからぬ性質はないと言つてよい。性格の上にひき及ぼす結果からいへば此の方が、彼の放肆なるわがま、よりは却つて眞に憂ふべく又怖るべきことが多いのである。

即ち次のことを以て教育上第二の結論としなければならぬ。

子供のわがま、は餘りに無理な抑へ方をしてはならない。抑制の習慣を養ふと共に害なき程な多少の自己主張を満足させてやる注意を怠つてはならない。